

## 子どもの発達における父親の役割と父親への援助に関する研究

### 心理相談の事例研究を通して その3 家族関係と子どもの発達

吉田弘道<sup>(1)</sup>、野尻 恵<sup>(2)</sup>、安藤朗子<sup>(3)</sup>、尾崎真理子<sup>(4)</sup>

要約：心理相談の事例を対象に、家族全体の関係の問題と関係の改善の観点から、子どもの心理的問題の発症と改善について検討した。各事例について、父親・母親・子どもの三者関係を、情緒交流の方向と量、質の点から分析し、この関係が相談開始時と相談を経過した後でどのように変化しているかを、予後良好群と予後不良群で比較した。その結果、三者関係が安定していれば子どもの心理的問題は生じない、相談開始時に夫婦関係が安定している事例は予後が良好になることが多い、母子関係に問題があったとしても母子共生関係に陥っていない事例は問題が解消しやすい、子どもの問題が改善するときには三者関係の三つが安定化する場合と母子関係と父子関係の二つが安定化する場合が多くみられる、子どもの問題が解消するときには三者関係のうち幾つかの関係の改善が重複して生じている、ということが明かとなった。以上の結果より、子どもの心理的問題を家族全体からとらえ、援助する時に、子どもはもちろんのこと、母親だけではなく父親も含めた家族全体を視野に入れて援助することの重要性を確認できた。

見出し語：心理相談、事例研究、父親・母親・子どもの三者関係、関係の変化と問題の解消、

#### I. 目的

平成5年度は、心理相談の事例を整理し、心理的発症と改善における母親側の要因と父親側の要因、夫婦関係の影響、父親の役割について検討すると共に、父親の役割が発揮できる条件および父親への援助について検討した。

今年度は、子どもの心理的問題の発症と改善を、家族全体の関係の問題、あるいは、関係の変化という観点から検討した。

#### II. 方法

##### 1. 対象

- .....
- (1) こどもの城小児保健部、(2) 桜ヶ丘記念病院、(3) 東京都立教育研究所、  
(4) 東京都立梅ヶ丘病院、

班員が心理相談を担当した事例の中から、症状の発症および症状の改善に父親の要因が強く影響していると判断して選びだした事例35例（男子20例、女子15例）を対象とした。このうち、26例は平成5年度の対象者であり、これに新たに9例を追加した。対象者の年齢は、幼児2例、小学生17例、中学生以上18歳未満14例、18歳以上2例であった。相談内容および診断の内訳は表1に示した通りである。

## 2. 整理方法

### (1) 父親-母親-子どもの三者関係の分析

それぞれの事例につき、父親・母親・子どもの三者関係を情緒交流の方向と量、情緒的交流への応答性、関係の質の点から分析し、ソシオメトリック的な方法で表示し整理した。なおこの表示の基本パターンは表2のようにした。この分析を、相談開始時と、相談経過後に問題が改善した時点、あるいは相談終結時および相談経過後2年以上経た時点の2回実施し、三者関係の変化を比較検討した。

### (2) 予後の良好群と不良群の分類

35事例を、相談経過が順調に進み予後も良かった「良好群」24例（幼児期2例、児童期13例、思春期・青年期9例）と、相談を進めるうえで困難さがあり予後も良くなかった「不良群」11例（児童期4例、思春期・青年期7例）の2群に分類した後、父親・母親・子どもの三者関係を両群の間で比較した。

## III. 結果

### 1. 相談開始時の三者関係について

相談開始時の三者の関係を整理したところ、「良好群」24例から22通りの関係図が（図1から3）、また「不良群」11例から11通りの関係図が描けた（図4と5）。関係図には、三者関係が全て安定しているものはみられなかった。

両群を比較すると、夫婦関係に大きな違いが見いだされ、「良好群」では、8例（37.9%）が関係が安定していたが、「不良群」では0であり、「夫婦関係食違い」も「不良群」に6例（54.5%）あった。また、母子関係では、「母親が子どもに干渉的」が「良好群」に多く12例（50%）あったのに対し、「不良群」では「母子共生関係」が5例（45.5%）あった。この他に父子関係では、「不良群」では、「父子関係希薄」の割合が高かった（表3）。

以上のように、夫婦関係が良好であり、母子関係が「干渉的」程度である場合には予後は良好であるが、夫婦関係が悪く、母子関係も「共生関係」に陥っている場合には問題の改善に時間がかかることが明らかになった。

### 2. 相談後の変化について

「良好群」では、全例に何らかの改善の方向への変化が生じていたが（図1、2、3）、「不良群」では、6例（54.5%）に変化が生じているだけであった（図4、5）。しかし、このうち2例は悪化ともとれる変化であり、結局改善への変化は4例（36.4%）に過ぎなかった。

相談後の三者関係を整理すると、「良好群」では、A型からF型と、その他の7種類の型になった（表4）。このうち、A型（三者関係安定型）が最も多く、10例（41.7%）であり、次いで、B型（父子関係・母子関係安定型）が7例

(29.2%)であった。この他には、C型(夫婦関係・母子関係安定型)2例、E型(母子関係のみ安定型)1例、F型(父子関係のみ安定型)3例であった。D型(夫婦関係・父子関係安定型)はなかった。

関係の変化を整理すると、夫婦関係が改善したものが6例(25.0%)、父子関係が改善したものが19例(79.2%)、母子関係が改善したものが17例(70.1%)あった(表5)。

またさらに、A型になるために生じた変化をみると、夫婦関係と母子関係、父子関係の三つが改善したもの3例、夫婦関係と父子関係の二つが改善したもの1例、母子関係と父子関係の二つが改善したもの6例であった。B型になるための変化をみると、夫婦関係が改善したもの2例、父子関係と母子関係の二つが改善したもの3例、父子関係および母子関係の一つが改善したものそれぞれ1例ずつであった。以上のように、「良好群」では、三者関係の幾つかの改善が重複して生じ、子どもの心理的問題が解消していることが明かとなった。

これに対して、「不良群」では、相談経過後に「良好群」のA型からE型は見られず、F型(父子関係のみ安定型)が2例みられたのみであった。また、夫婦関係、父子関係、母子関係に変化がみられたものは、それぞれ2例にすぎなかった。

#### IV. 考察

1. 三者関係と子どもの心理的問題の発生と解消  
父親—母親—子どもの三者関係を整理し、子どもの心理的問題の改善との関係を検討した結果、相談開始時の関係図に、三者関係の全てが安定し

ているものはみられなかった。また、子どもの心理的問題が解消するときには、三者関係三つが安定するように変化している場合が多かった。このことは、三者関係が安定していれば、子どもの心理的問題は生じないか生じにくいこと、あるいは生じた場合でも、子どもの問題はすみやかに解消することを予想させるものであった。

次に、相談開始時に夫婦関係に問題がなかった事例は予後が良好になることが多いということと、子どもの心理的問題が解消するとき夫婦関係に改善の方向への変化が多く生じることが見いだされた。子どもの心理的問題の改善における夫婦関係の重要性については昨年度にも報告し、夫婦関係が良好であると、相談にも夫婦で参加する度合いが高く、また父親の役割を果たしやすいことを報告した<sup>(1)</sup>。また、同じ研究班の恒次らのアンケート調査の報告<sup>(2)</sup>でも、夫婦関係が良好であることと父親が子どもと積極的にかかわることとの間には相関関係のあることが見いだされている。以上のことは、子どもの心理的発達と健康に家族の中の夫婦関係が中心的な役割をもっていることを示しているものと考えられる。

ところで、夫婦関係に問題が残っていても母子関係と父子関係の両方が安定し、心理的問題が解消している事例もみられた。しかしこの場合でも、夫婦関係に対立がある場合には問題の解消はなかったもので、やはり、ある程度夫婦間に情緒的交流のあることが必要であると思われる。ちなみに、母子関係と父子関係の両方が安定化した事例の場合には、母子関係だけではなく父子関係にも変化が生じたことを表しており、問題の解消に父親の影響があったことが明かであった。このことは、

父親の大切さを示すものといえよう。

他に結果では、子どもの問題が解消するとき、夫婦関係、母子関係、父子関係の三つの関係のうち、幾つかの関係の改善が重複して生じていた。このことは、三者関係は、一つの関係が変化するとその影響で他の関係も変化するというように連鎖し合うということを示しているといえる。

## 2. 指導における対応

以上の結果と考察を指導と結びつけると次のようなことが考えられる。

子どもの心理的な問題が解消する場合には、夫婦関係、母子関係、父子関係の改善が重複して生じることが多かった。このことは、子どもの心理的問題に対応するには、子ども本人はもちろんのこと、母親だけではなく父親へも援助することが必要であることを示している。これに対応するためには曜日や時間を考慮し、父親も相談に参加しやすい状況を設定することが必要である。

父親が相談に参加するかどうかは、相談条件だけではなく夫婦関係が関係している。関係が良好である場合には、父親が相談に参加する度合いが高いし、予後も良好であることが多い。しかし、夫婦関係が良好でない場合には問題の解消に時間がかかることが多いので、このような事例の場合には、相談を受ける側は、慎重にかつ長期にわたって継続的に相談にかかわっていく心構えをした方がよいと考えられる。

夫婦関係が良好でない場合でも、相談を受ける側は夫婦と一緒に相談に参加する機会を設けるようにし、相談の中で、子どものことばかりではなく、夫婦関係、母子関係、父子関係等の家族関係

についても話せるようにすることが望ましい。話題が夫婦関係におよんだ場合には、お互いを攻撃するのではなく、関係をお互いに理解し合い、改善の方向に向けて話し合えるようにその場を調整する役割を相談者は担うことになろう。また相談者は、場合によっては、父親と母親に別個に会い、個人的な問題の解決にむけて援助するとともに、相手の理解を深めるような対応も必要になろう。このようなアプローチには、家族療法や夫婦療法の知識が役立つであろう。

## V. 3年間のまとめ

①子どもの心理相談の事例研究を通して、子どもの心理発達における父親の役割と父親への援助について検討した。

②子どもの心理的問題が生じるときには、母親側の要因が関与している場合が多いが、父親側の要因が関与している場合も少なからずある。

③父親の役割が果たせていないことと子どもの心理的問題の発生との関連性を検討することにより、子どもの発達における父親の役割として、「ア、母親を支える役割」、「イ、子どもとかわり母親と違った目で子どもを見守り支える役割」、「ウ、母子の共生関係に介入する役割」、「エ、同一化の対象となる役割」を選択した。これらの役割が果たせるようになることと、子どもの心理的問題の解消は関係している。

④家族関係から子どもの問題を捉えると、子どもの心理的問題は、父親—母親—子どもの三者関係の問題と関係している。したがって、夫婦関係、母子関係、父子関係が相互的に関係しながら変化するとき、父親は役割を発揮できるし、子どもの

問題は解消する。

⑤子どもの心理的問題に対応するときに、相談を受ける側は、子どもはもちろんのこと、母親と父親への援助を行う必要がある。特に、父親への援助を行うには、父親が相談に参加しやすい状況を設定することが大切である。

⑥夫婦関係が悪い事例に対して援助をする場合には、家族療法や夫婦療法の知識が役立つ。

#### 参考文献

(1) 吉田弘道、他(1994)、子どもの発達における父親の役割と父親への援助に関する研究：心理相談の事例研究を通して その2、厚生省心身障害研究、少子化時代に対応した母子保健事業に関する研究、平成5年度研究報告書、141-152。

(2) 恒次欽也、他(1995)、育児における父親の役割に関する調査研究、厚生省心身障害研究、少子化時代に対応した母子保健事業に関する研究、平成6年度研究報告書。

表1 対象の内訳

診断名	人数
登校拒否	15
神経症(ヒスリー、様、記臭)	6
摂食障害	3
喘息、チック、脱毛	4
集団不適応	6
境界例	1
計	35名

表2 関係の表示パターン

情緒的交流の量と関係の質

パターン	説明
————	普通の量、普通に対応
-----	交流が少ない
————→	交流が過度 干渉的關係
↔	共生的關係
→ X ←	対立的關係
• •	ほとんど關係なし

情緒の流れる方向

パターン	説明
↔	相互的な流れ
————→	一方向的流れ
————→	相手に拒否される

(例)

パターン	説明
↔	両者が安定した關係
————→	一方は關係をつけよう としているが相手は拒 否的
↔ ————→	お互いにちぐはぐ
————→ ————→	一方が干渉的で、もう 一方は普通に対応

表3 相談開始時の關係

	良好群 (24名)	不良群 (11名)
夫婦關係安定	8 (33.3%)	0
夫婦關係希薄	8 (33.3%)	4 (36.4%)
夫婦關係食違い	2 (8.3%)	6 (54.5%)
夫婦交流なし	2 (8.3%)	0
夫婦關係対立	1 (4.2%)	1 (9.0%)
母子關係安定	1 (4.2%)	1 (9.0%)
母子關係希薄	2 (8.3%)	2 (18.2%)
母子共生關係	4 (16.7%)	5 (45.5%)
母が子に干渉的	12 (50.0%)	3 (27.3%)
父子關係安定	4 (16.7%)	1 (9.0%)
父子關係希薄	9 (37.5%)	5 (45.5%)

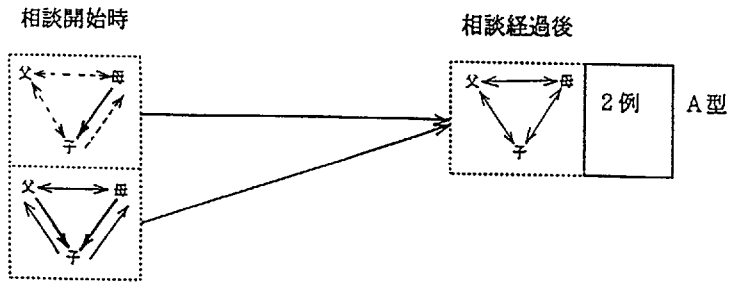


図1 三者関係—相談開始時と相談経過後の変化  
「良好群」幼児2例の結果

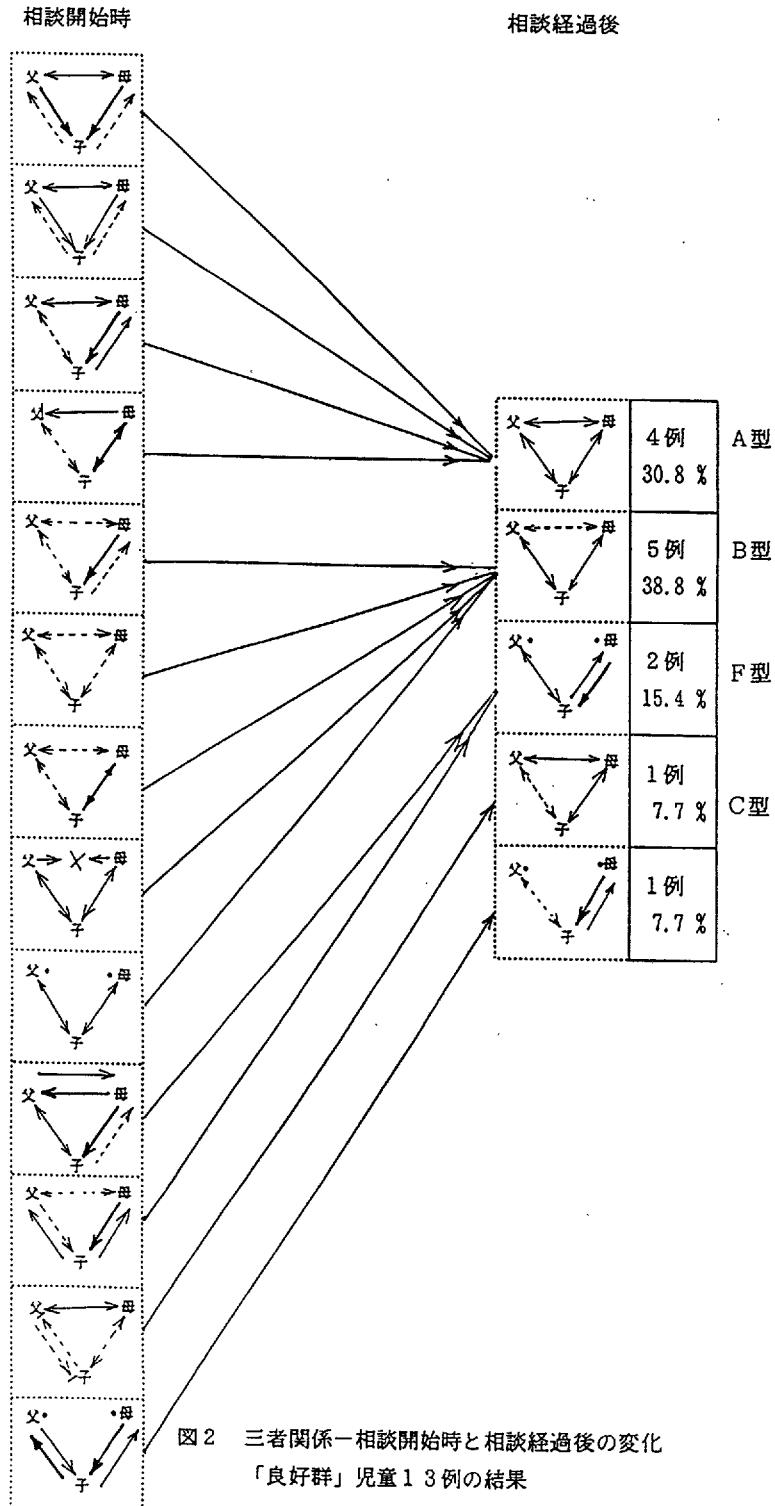


図2 三者関係—相談開始時と相談経過後の変化  
「良好群」児童13例の結果

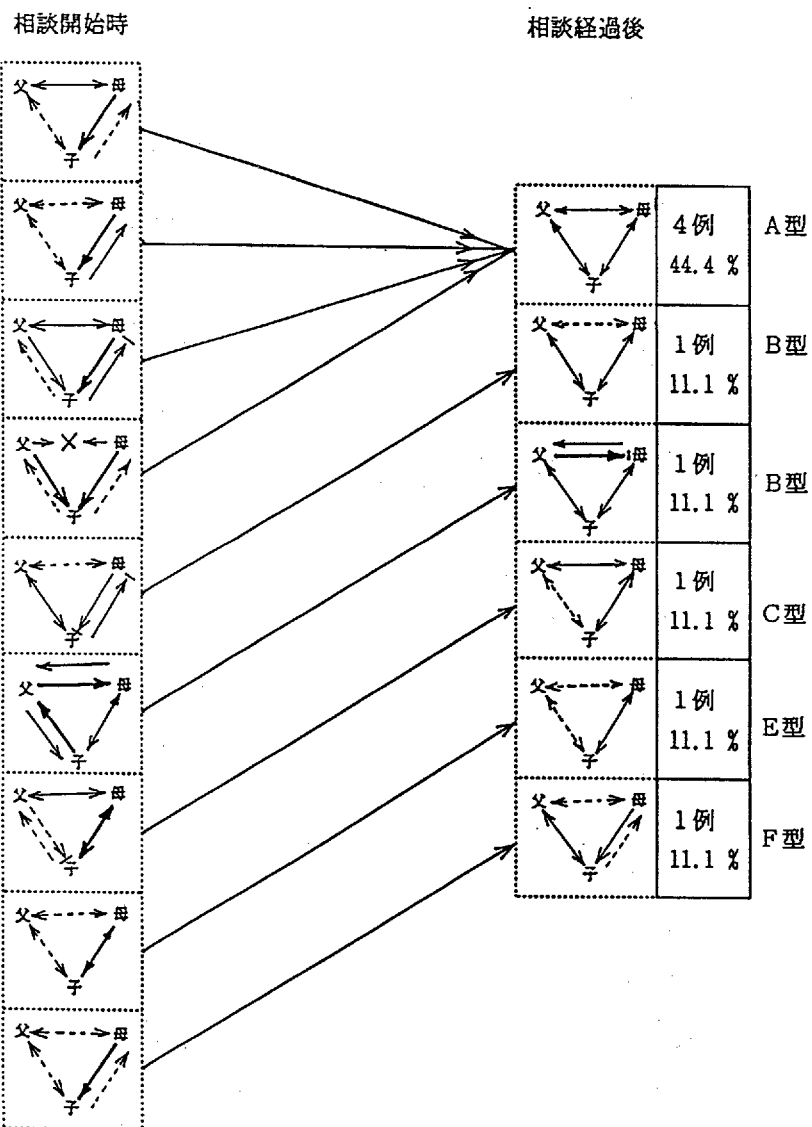


図3 三者関係—相談開始時と相談経過後の変化  
「良好群」思春期・青年期9例の結果



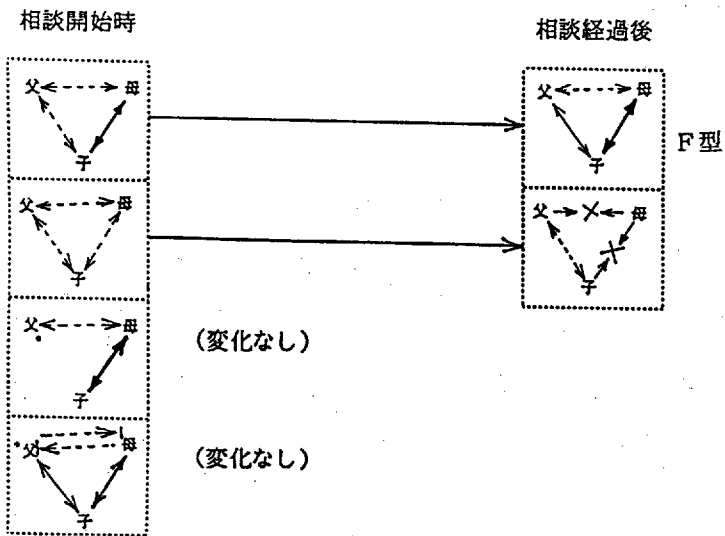


図4 三者関係—相談開始時と相談経過後の変化  
「不良群」児童期4例の結果

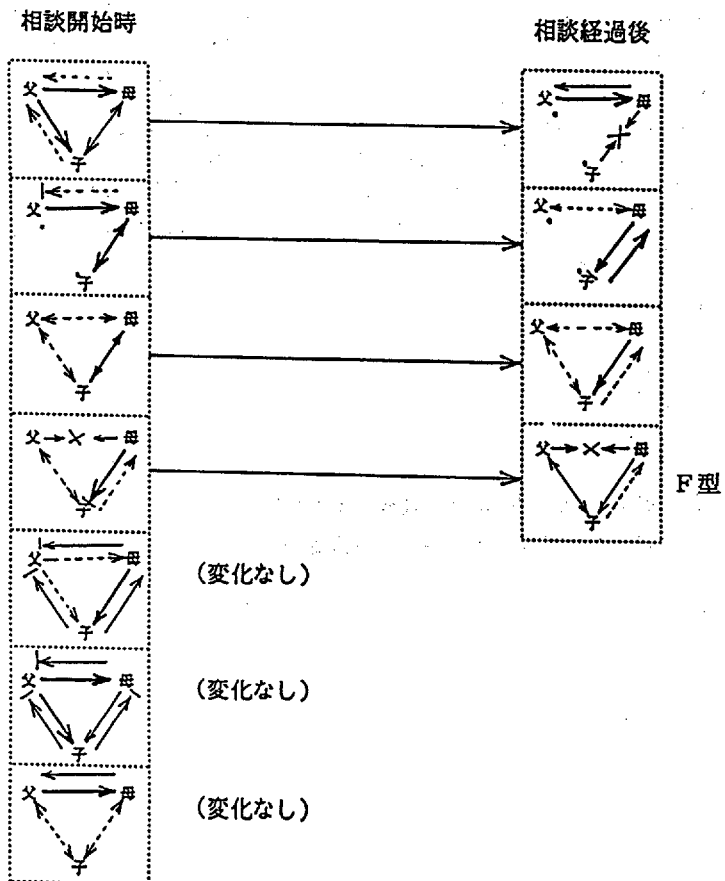


図5 三者関係—相談開始時と相談経過後の変化  
「不良群」思春期・青年期7例の結果

表4 「良好群」24例の相談経過後の結果

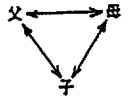
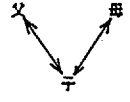
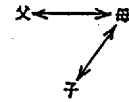
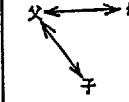
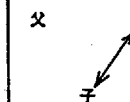
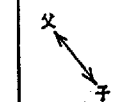
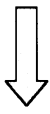
A 型	B 型	C 型	D 型	E 型	F 型	その他
三者関係安定型	父子関係・母子関係安定型	夫婦関係・母子関係安定型	夫婦関係・父子関係安定型	母子関係のみ安定型	父子関係のみ安定型	
						
10例 41.7%	7例 29.2%	2例 8.3%	0例	1例 4.2%	3例 12.5%	1例 4.2%

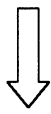
表5 相談経過後の関係の変化  
(少しでも改善の方向への変化がみられた事例数)

	良好群 (24名)	不良群 (11名)
夫婦関係	6 (25.0%)	2 (18.2%)
母子関係	17 (70.1%)	2 (18.2%)
父子関係	19 (79.2%)	2 (18.2%)



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:心理相談の事例を対象に、家族全体の関係の問題と関係の改善の観点から、子どもの心理的問題の発症と改善について検討した。各事例について、父親・母親・子どもの三者関係を、情緒交流の方向と量、質の点から分析し、この関係が相談開始時と相談を経過した後でどのように変化しているかを、予後良好群と予後不良群で比較した。その結果、三者関係が安定していれば子どもの心理的問題は生じない、相談開始時に夫婦関係が安定している事例は予後が良好になることが多い、母子関係に問題があったとしても母子共生関係に陥っていない事例は問題が解消しやすい、子どもの問題が改善するときには三者関係の三つが安定化する場合と母子関係と父子関係の二つが安定化する場合が多くみられる、子どもの問題が解消するときには三者関係のうち幾つかの関係の改善が重複して生じている、ということが明かとなった。以上の結果より、子どもの心理的問題を家族全体からとらえ、援助する時に、子どもはもちろんのこと、母親だけではなく父親も含めた家族全体を視野に入れて援助することの重要性を確認できた。